

『平家物語』の受容と変容

——『平家物語評判瑕類』を中心に——

堀 竹 忠 晃

はじめに

『平家評判瑕類』は『平家物語評判秘伝抄』についての批判書である。『平家評判瑕類』の序に「雪江居士」なる者の執筆があり、さらに当の著者逸竹居士なる者の「自序」がある。¹⁾

ついで「凡例」があるが、これは当著者逸竹居士の『平家評判瑕類』における編集方針を示したものである。そこには『平家物語評判』²⁾についての批判的言辞が、³⁾と述べられている。その主要な批判的言辞を簡略に要約してみよう。

○『平家物語評判』は一人の著述ではない。数人の作をまとめて後校考したものである。議論一決せざる所が多い。

○正しいところもあるが、私意多き所もある。徳を談ずることは疎略である。

○引用書物——多田家伝、秀平義経門対、鬼一家伝以下の伝記、聞書きは皆寓言である。これらの多くは『吾妻鏡』によつて

いる。

○营陣、行伍、火薬、器械等上代にない物を取り出し議論している。この時代に不相応の物である。

以上これらの批判的言辞については後に述べる。

一、『平家評判瑕類』の構成

まず巻数は五卷五冊であり、それぞれ巻々によつて作者の評論がどのように展開されているかを、今数字によつて示す。

卷一

（章段名）（評論箇所の数）

鱸	1
禿童	2
吾身栄花	2
妓王	2
清水寺炎上	3

殿下乗合	2
鵜川合戦	1
座主流	5
小松教訓	4
教訓	1
蜂火	1
新大納言死去	1
徳大寺殿嶋詣	1
善光寺炎上	1
許文	2
御産巻	1
卷二	
有王嶋下	1
廳	1
医師門答	1
無文沙汰	1
燈籠	1
金渡	2
行隆沙汰	1
源氏揃	2
競	1
山門牒状	1
大衆揃	2
	(伝1)
	(伝)
	(伝)
	(伝1)
	(伝1)
	(伝3)

橋合戦	4
三井寺炎上	1
都還 ^付 都落沙汰	1
大庭早馬	1
咸陽宮	1
文覚強行	2
勸進帳 ^{付た時きれ}	1
伊豆院宣	1
富士川合戦	2
新院崩御	1
紅葉	1
小督	1
廻文	1
卷三	
入道逝去	3
経嶋	1
祇園女御	1
喘涸声	1
横田川原合戦	3
北国下向	3
竹生嶋詣	2
火燵合戦	4
俱利迦羅落	3
	(伝2)
	(伝1)
	(伝2)
	(伝1)
	(伝1)
	(伝)
	(伝1)
	(伝1)

篠原合戦	1	(伝)
実盛最後	1	
主上都落	1	(伝)
忠度都落	1	
福原落	2	(伝1)
山門御幸	1	
那都羅	2	
猫間	1	
水嶋合戦	3	(伝1)
卷四		
瀬尾最後	1	
法住寺合戦	2	
小朝拝	1	
宇治川	6	(伝1)
河原合戦	2	
木曾最後	2	
三草勢揃	1	
三草合戦	1	
老馬	1	
一二懸	1	
浜軍	1	
頸渡	1	
請文	1	(伝)

高野卷	1	
維盛出家	1	(伝)
卷五		
藤戸	2	
大嘗会沙汰	1	
逆櫓 ⁷ 勝浦合戦	6	
大阪越	1	
嗣信最後	1	(伝)
那須与一	1	
遠矢	1	
先帝御入水	2	
大臣殿誅罰	1	
能登殿最期	1	
平大納言文沙汰	1	
吉田大納言沙汰	2	
六代	1	
女院御出家	0	

さて、これを十二巻本『平家物語』の巻数区分に直してみると
次のようになる。

鱧く鶴川合戦 (巻一)	
座主流く善光寺炎上 (巻二)	
許文く行隆沙汰 (巻三)	
源氏揃く三井寺炎上 (巻四)	

都遷く富士川合戦（巻五）

新院崩御く横田原合戦（巻六）

北国下向く福原落（巻七）

山門御幸く法住寺合戦（巻八）

小朝拝く浜軍（巻九）

頸渡く大嘗会沙汰（巻十）

逆櫓勝浦合戦く能登殿最期（巻十一）

平大納言文沙汰く六代（巻十二）

女院御出家（灌頂巻）

巻一から巻十二までの巻数区分したなかでの評論箇所数は次のようである。

巻一	13	巻八	10
巻二	14	巻九	16
巻三	11	巻十	7
巻四	11	巻十一	14
巻五	8	巻十二	4
巻六	13	灌頂巻	0
巻七	18		

さて、巻五の「伊豆院宣」及び「灌頂巻」の段で『平家物語評判』と関係のない、著者独自の評論は数字に入っていない。

ところで、『瑕類』の評論については『平家物語評判』の「評」の部に関する批判が圧倒的に多いことである。さきの分類区分を見ても分かるように、「伝」の部に対する評はほとんど僅少とい

うことである。また、かならずしも『平家物語評判』の「評」や「伝」の部に関係なく、著者自身『平家物語』の記述を批判したところもわずかながらもあることはさきに述べた。

二、偽書説について

さきに『平家評判瑕類』の「凡例」を紹介した時著者逸竹は、引用書物は皆寓言であると述べていると言ったが、再度確認したい。

引き用類 記録多田家伝 秀平義経問对 教経景清問答
源成翁兵話 鬼一家伝 住吉昌長孝文等其余の伝記聞書皆寓言なり。今按に是等の記多くは東鑑によつて出入し擬作す。古代の語にあらず。

ここで『平家物語評判』がしばしば引き合いに出す『多田家伝』について『平家評判瑕類』の作者はどう考えているか、具体的にみてみよう。

たとえば『平家評判瑕類』巻一「吾身栄花」についての評は次のようである。

多田家伝記 按此一説名を借りたるもの也。古記は多く天官の書なり。然るに此謀は六韜文伐十二節の法を取て和やしたる物也。

ここで元の『平家物語評判』の「吾身栄花」では『多田家伝記』はどう扱われているかみてみよう。

今『平家物語評判』より当該部分を引用する。

多田家伝之記曰。天下國家を治るには、人の心を和し、交を近くするには、其人の氣精を了て謀を用べし。人の心なへて色欲ふけり安し。是十人に八人は是をもつて謀の便す。故に実子の娘をもつて是を嫁し、実子なき時は養子をもつて疑、數者の心を取傾べし。其外家子郎等には、給仕の女をもつて是に妻合すべし。其外四方に網をかけて是をとれと云り。

ところで、『多田家伝記』の實在については岩波の『国書総目録』に同名の書はなく、『多田五代記』なる書が實在する。『平家物語評判』にいう『多田家伝記』と『多田五代記』との關係については今不明であるが、明治四十四年に発刊された『多田五代記』（軍談家庭文庫）に関して言えば、この書は十巻よりなり、元禄四年の刊本で、満仲より義家まで源家五代の事蹟を叙述している。

『平家物語評判』には前後五箇所にわたつて、『多田家伝記』の紹介記事があるが、いずれも既存の『多田五代記』にはその内容は見当たらない。あるいは『多田五代記』とは別種の、多田家に伝わる『多田家伝記』があつて、それが多田家に伝承され、『平家物語評判』の作者はそれを見たのかも知れないが、『平家物語評判』の作者の傾向として、これはどうも真実ではなさそうである。やはり『平家評判瑕類』の作者のいうように偽書と考えた方がよいのではあるまいか。

しかし、いずれにしても源氏の多田家には兵法伝来の伝承があつたことは事実である。

ところで、『多田五代記』には兵法書伝来について次のように述べている。

抑此の軍書は、醍醐天皇の御時、延喜五年乙丑三月十一日に、左大弁宰相大江惟時に命じて、よき儒書、聖經、賢伝兵書を伝へ来るべしとて、沙金十万両を持せて異朝に遣し給ふ。惟時先づ金五万両を唐朝の天子昭宣帝に奉り兵府をもとむ。勅命に依りてさまざまの儒書兵書ことごとくに相伝ふと雖も、言語侏儻にして通ぜざれば、此書通曉し読み明すること能はず。之に依りて延喜五年より承平四年まで、三十年間留学して、先づ五經三史文選に通じて、經書三史の成功に依りて軍書武經の明法を著す。五代に入つて呉越の王元堪并に閩の惠宗延に謁見して九經を求め得て、朱雀院の承平四年甲午の年帰朝す。（巻第一「満仲惟時より軍書を伝ふ事」）

さて、天皇は御感あつて維時學ぶところの兵法を武士に伝えて本朝の宝となさんと武士の器量を選んだところ、左馬守満仲こそ文武の将であるとして、大江惟時に勅命を下し、八幡の宝前で深齋すること三日にしてこれを伝えたが、唐本の軍書であることから通読しなかつた。そのため未學者のために和字に直し、訓と仮名とで伝えたので満仲はひとつとして通達せぬことはなかつた。これを『訓聞集』と言ひ、鞍馬の毘沙門天王の宝殿に藏めたが、鬼一法眼は宝殿より申おろし、これを秘して石櫃に藏めて外に出さなかつた。ところが源義経はそのことを伝え聞き、鬼一の聲となつてこれを求めて遂に平氏を滅亡させた。その後武田家、細川

家、小幡家、北条家等に伝えたという。今の七書、六韜三略、孫子等もそのなかにあるという。

大江維時が兵書を求めて入唐したという記録は、その事実を今確認できない。『日本紀略』をはじめ『公卿補任』『尊卑分脈』その他の史書、記録類にも入唐のことは一切記載されていない。ただ「統群書類従」の「大江家系図」には維時の入唐及び兵書の伝授のことが述べられている。

維時（参議右大弁從二位 中納言 母伊勢守文雄女。醍醐天皇御宇延長元年五月入唐。七書軍勝聞伝受。朱雀院御宇承平帰朝。同五年始誦文選。）

この「系図」の最期にいう朱雀帝承平五年にはじめて文選を誦すとあるが、これは『日本紀略』の同年十一月条に「文章博士大江維時始誦『文選』」とあることと一致する。さらにさきの『多田家五代記』に維時が「五經三史文選に通じて」とあるのにも符号する。

ここでさらに問題になるのは大江維時と源満仲との兵書を通じての師弟関係である。この説話の由来は何によったものであろうか。

これは憶測の域を出ないものだが、その背景には大江匡房と源義家の兵法をめぐる説話が大きく影を投げかけているのではない。

『古今著聞集』巻九「武勇第十二」にある「源義家大江匡房に兵法を学ぶ事」の説話がそれである。義家が時の一代碩学大江匡

房に兵法を学んだことにより、永保の後三年の役の時、雁が群れ飛んだのを見て、師匡房の言葉「夫軍、野に伏す時は、飛雁つらをやぶる」を思い出し、敵の背後を味方の軍を割いて攻め、戦間に勝利を得たという有名な話である。この「雁の飛行」のことは『孫子』にも見えることから匡房は、『孫子』の兵法書を読んでいたであろう。

当代の碩学匡房と当代の並びなき武將義家との兵法をめぐる二人の結びつきを語る説話の一大影響力が後世の武勇説話に影響し、維時、満仲の兵書をめぐる師弟関係を形成したのではなからうか。

わが国への兵書の伝来は吉備真備によるものとされているが、『続日本紀』の淳仁天皇天平宝字四年十一月十日条に「授刀舍人春日部三閔、中衛舍人土師宿禰閔成ら六人を太宰府に遣して、大式吉備真備に就きて、諸葛亮が八陳、孫子が九地と結宮向背とを習はしむ」という記録によっても確かめ得る。また、藤原佐世撰による『日本国見在書目録』にも兵書が記録されていることから、兵書の伝来は確認できる。勿論『孫子』以下の兵書は中国の漢文で記載されているからその判読は漢文に素養のある漢学者でなければ判読できないことから、兵書を必要とするが漢学の素養のない武士と素養のある漢学者の結びつきは、あるいは歴史上必然的で自然な結びつきであったかも知れないのである。そのような背景も手伝って、さきの『古今著聞集』の武勇説話も加わり、維時と満仲の説話伝承は生まれたのかも知れない。

ところでさきの『多田家五代記』にいうところの『訓閑集』について、貞丈は次のようにいう。

一 訓閑集と云書あり。醍醐天皇の御時、大江維時入唐して伝来たる軍術の秘書也。其書は今伝はらず。今世に訓閑集といふ書あり。是は後の人の偽作なり。〔貞丈雜記〕十六書籍之部〕

貞丈自身維時の入唐を信じている口吻であるが、これはさきにも述べたように確認できない。とすれば『訓閑集』の存在すら維時の作とは断じ得ない。まして後世の『訓閑集』は貞丈のいうように偽作であろう。

後世の偽作ともいふべき『訓閑集』は、『国書総目録』を繕けば、あちらこちらの公共の図書館、大学の図書館にも現存するが、今京都府立総合資料館所蔵の『訓閑集』を弊見してみよう。全部で十二冊、いずれも江戸期の写本である。『訓閑集』の中の一冊「訓閑集秘術」の奥書に次のような記事がある。

右一冊者從六孫王以降取伝テ当家秘術之貴裡紙也此旨可守可察者也穴賢千金莫伝

貞観二

二月日

從三位前伊予守頼義朝臣

從三位大膳大夫頼氏朝臣

從三位伊予守氏隆朝臣

小池甚之函

貞成

斎藤三郎左衛

久成

水嶋 卜也

之成

梶田忠大夫

政有

及川源五兵衛

広之（花押）

文化十三^一年五月写之

「訓閑集秘術」の書写者である及川源五兵衛広之なる人物については未詳である。源氏の多田家に所縁のある人物かどうか不明である。しかし、『訓閑集』が、源氏の多田家も関与したものであることは、さきの跋文によっても確認できる。

源氏の多田家が兵法の家、または兵法書を有する家として、伝承されてきたことは否めない事実である。義経に兵法を教えたといわれる鬼一法眼は実は多田満仲の末男の子孫という伝承もあるほどである。

一八幡太郎大江の匡房に伝受の三略の法を以て、軍法射礼数男子に可し伝機非ずとて、紀州熊野山に其巻を納むゆへに絶ず。是も三略を以て種として、鬼一は其頃源氏支流の者にて、軍法者なり。多田満仲の末男出家して伊予国に居。伊予の阿闍梨といふ、其子孫鬼一にて、渠も予州より出て、熊野

まで学修行す。(「軍法兵道之次第」『玉露燈話』十四)

また、さきの『多田五代記』の「満仲惟時より軍書を伝ふ事」

に小幡上総守の家臣岡本喜庵なるものが、多田家伝来の「策壁大星術」を用いて、大いに勝利を得たと述べているが、この大星の術に関する書物が兵法書として存在する。『多田家大星之伝来』と題する写本である。現在大阪市立大学図書館森文庫に所蔵されている。その奥書きによると、天明五年正月書写者・新川盛周の署名がある。高橋勝与が新川盛周に授けた由の記載がある。

『多田家大星之伝来』によると、大星は神代より始まり、神武天皇がことに大星の策を用いたことは日本紀にも見え、後代には朝廷より多田満仲へと伝授があり、代々多田家が大星を相伝したことを伝えている。また大星は「ウカノミタマト訓ス」と言い、「秘訓」という。

ここにいう記事の内容の真偽についてはさだかではない。後日を期したいが、いずれにしても多田家が兵法の家として世間に喧伝されていたことは疑いようもない。そのような背景のもとに『平家物語評判』にいうところの『多田家伝記』なるものも創作されたものであろう。

他に『平家物語評判』で述べられている兵法書は『鬼一伝記』『義経佐藤嗣信問答』『義経秀平問答』等多種存在するが、このような問答類や伝記類に関するものは、さきの『多田家伝記』の類と同種のものとなしてよく、偽書類、あるいは『平家物語評判』作者の創作と見る方が妥当であろう。

三、歴史的意識について

『平家評判瑕類』の歴史的意識について述べたい。

①北条時政、天下の風儀を窺わんがために、佐々木四郎高綱等を遣わすことについての評

まず『平家物語評判』の記すところを見てみよう。

伝曰。北条時政、天下の風儀をうかゞはんが為に。信吉高綱兩人をもつて上京せしめ、平家の政をみせしめ給ひけるに、この兩人洛中に遊行して、しるし帰る日記

嘉応元年二月七日覚

以上何ヶ条かにわたつて、その「覚」なるものを記している。

今主要なものを記載してみよう。

○三月二日清盛一院を恨奉る事有と云々意趣しらず

○同四日院中の公卿、平家追討の企有とも申。亦四国に一揆有と云々。

○院方の雲客。并京中の女子まで平家をうとみそしる事のみ、日々に沙汰する事

○源三位頼政を小松殿うたがひ思はれける由の事。并其氣の発相数多有事(巻一之下「殿下乗合」)

これら一連の『平家物語評判』の「覚」に対して、『平家評判瑕類』の作者はどう評しているか。

按に是寓言なり。佐々木四郎高綱頼朝の義兵を掲げ給ふを聞て治承四年八月十七日末の刻、佐々木太郎定綱、同二郎綱

高、同三郎盛綱、同四郎高綱兄弟四人鎌倉に参着すと吾妻鑑に見えたり。然るに嘉応元年二月七日覚云と有る事、年数拾一年の違い有。是大なる虚説也。(巻第一「殿下乗合」)

これだけでは『平家評判類』の作者のいう『平家物語評判』の「虚説」という理由はよくわからない。『平家評判類』の作者の思考を作者にそつて敷衍するところということだろうか。

佐々木兄弟が頼朝の挙兵を聞いて駆けつけたのは治承四年八月十七日未の刻であつた。「覚」の記録はその時より十一年前の出来事である。十一年前に佐々木高綱が頼朝や北条時政に同心して、平氏の動向を探るほどの行動力があつたかどうか不明であるということであろうか。

『吾妻鏡』治承四年八月九日の記事に佐々木源三秀義のことが述べられている。彼は定綱、高綱等の父であるが、平治の乱以後源氏の旧好を忘れずに、また平家の権勢におもねらず、相伝の地、佐々木庄を交替させられたために、子息一同を引き連れて奥州に赴こうとした途次、相模国に到つたが、渋谷庄司重国は秀義の勇敢に感じて佐々木一家を彼の許に居住せしめて二十年の月日が経過した。その間子息定綱、盛綱は頼朝の輩下に属したという。以上の記録から考えると、佐々木一族は平治の乱以後、一貫として心を頼朝につくしてきたのであろうことは推測できる。とすれば嘉応元年の時点でも佐々木の頼朝に対する忠誠心は何ら変わらなかったと思つてよい。したがつて『平家評判類』の推測は成立しない。しかし、やはり私は別の理由により高綱等の遊行は虚構

であらうと思う。

それは北条時政の動向である。頼朝の監視役としての時政が頼朝に心を許すようになるのは、時政の娘である政子と頼朝が結ばれるようになってからである。永原慶二氏によれば、二人の間に愛情が培われたのは祐親の娘との事件の後「なにかの時日がたち、もはや治承元年(一一七七)を迎えようとするころ」と推定されている。嘉応元年の時点で時政が頼朝に味方して、平氏の動向を探るというのはおかしな話である。あるいは時政は将来を見越して平家の動向を探っていたといつても、この時点では早計に過ぎる。また、『平家物語評判』によれば、清盛と院との不仲、さらに院の近臣ばかりでなく、京中の庶民までが平氏を疎んじたとしてゐることについてであるが、清盛が一院を恨んだことについては『平家評判類』の作者は、「高倉の宮御謀叛は鹿が谷談合の後こそ清盛恨奉る事有り」といつている。これは歴史を正確に認識したものである。さらに『平家物語評判』の説の虚構である根拠はまだまだあるが、『平家評判類』の作者に関することに限定しておく。

②文覚を頼朝の軍師とすることについての評

まず『平家物語評判』にはそのことに關して次のように述べている。

伝曰。高倉宮、領旨を頼朝に下し給ひてより以来、軍師には高尾の文覚、住吉小大夫昌長、万合戦の計略を伝申。(巻五之上「大庭早馬」)

これに『平家評判瑕類』はどう述べているのか。

按ニ高雄文覚上人を軍師とせらるる頼朝ならば頼朝の兵法甚淺陋なるものなり。此僧流刑に罹つて潜に上り院宣を乞ひ請て頼朝に授けし処を見るに生質豪強にして、世を軽くおもふ氣情有り。然とも俗法師にて眞の沙門の法にあらず。東鑑に軍の談合評定るとき、文覚一つの助言見え。然れば是偽也。(卷第二「大庭早馬」)

このところは『平家評判瑕類』の作者のいう通りである。『吾妻鏡』はもとより『平家物語』にも文覚が頼朝の軍師的存在であったとは何も語られていない。これもまた『平家物語評判』の創作であろう。

③兵法用語に関して

まず『平家評判瑕類』の批評に目を通してみよう。

伝云合戦終て佐藤四郎兵衛忠信九郎義経に問ひ奉りけると云々

按此記元より後の作文なれば、今評するにも不_レ及。然れども甚可_レ笑事有り。内々平家_ヲ検見を出し、追々に敵の去来を窺ふと云々。先つ検見遠候見分など云ふ事、近き比より起れり。源平の合戦の時分名も不_レ聞事なれば、寔にては平家にかきらず。此備無きとて誹謗するも大ニ無理也。(卷第三「主上都落」)

さきの『平家評判瑕類』に「伝云」として略述していた内容を実際の原典である『平家物語評判』の「伝」部から少し引用して

みよう。

伝曰。合戦終て、佐藤四郎兵衛忠信。九郎義経に問奉りけるは、木曾殿都に攻入給ふ時、平家敵を敗べき謀候はんや。義経曰。合戦の位、此時平氏の負軍也。されども謀を廻されば、一往は勝べし。先木曾越前の国府に有内に、内々平家検見を出して、追々に敵の去来を窺、軍勢を四方八面にかくし置……(以下略)(卷第七之下「二門都落」)

『平家評判瑕類』の作者は、このところ以外でも「検見」に類する語について述べており、近き世より起こったことだとしている。

○斥候_{いひ}を用事_{いひ}応仁乱以後の事なれば庄司が遺言に可_レ有ものならず。是偽也。(卷第二「富士川合戦」)

○物見と云ふ名目も古代になき事也。(卷第三「福原落」)さて、この「物見」の類に関する用語を『平家評判瑕類』の作者は応仁の乱以後といたり、近き頃より起こったというが、果たしてそうであるのか、今検証したい。

たとえば「令義解」(卷一、職員令)には「(大国、守一人……其陸奥出羽越後等國、兼知_二鑾給……征討。斥候_一(謂付遂也。言候_二遂於非常_一也)」とあり、また「令集解」(卷六、職員令)に「(大國……伴云、檀興律主將守城条云、若連_二接寇賊_一被遣_二斥候_一不_レ覺_二賊來_一者、徒二年」とある。いずれも敵情を偵察する意味に用いられている。

また、『日本書紀』『続日本紀』にも「斥候」の語は見えており、

古代から使用されていたことがわかる。

○二年の春正月の甲子の朔に、賀正礼畢りて、即ち改新之詔を宣ひて曰はく(中略)其の二に曰はく、初めて京師を修め、畿内国の司・郡司・関塞・斥候^{うきみ}・防人^{うきみ}・驛馬^{うきみ}・伝馬を置き(以下略)(孝徳天皇、大化二年正月、『日本書紀』)

○或いは人有りて奏して曰さく、「近江京より、倭京に至るまでに、処々に候^{うきみ}を置けり。(天武天皇、元年五月、『日本書紀』)

○己卯、勅して曰はく、「狂賊常を乱して辺境を侵し擾す。烽燧虞多くして、斥候^{うきみ}守を失ふ。(光仁天皇、宝龜十一年五月十六日、『続日本紀』)

さらに中世に至つて、たとえば『太平記』に「斥候」の語が見えている。

○(前略)楠帶刀正行・舎弟正時・和田新兵衛高家・舎弟新発意賢秀、究竟ノ兵三千余騎ヲ卒シテ、霞隠レヨリ幕直ニ四糸縄ヘ押寄せ、先斥候ノ敵ヲ懸散サバ……(以下略)(四糸縄手合戦事^上山討死事」卷第二十六)

以上から考えると、「斥候」及びそれに類する語は、『平家評判瑕類』の作者のいうように応仁の乱以後に始まつたり、あるいは近世より使用され出した兵法用語ではなく、既に古代より使用されていたことがわかる。単に用語例としてだけでなく、実際の戦闘にも使用されていたのである。その点歴史的意識に欠ける。

確かに『平家物語』には、「斥候」の語は使用されておらず、

またそれに類する語はない⁹。しかし、「斥候」という兵法があの源平時代の実際の戦いの場で、戦略的に全く用いられなかったとは思えない。たとえば屋島の戦いで、全軍出撃の前日、嵐がようやくひかえ目になった時について、荒波を乗り切つて出撃した義経の少数の先遣部隊は「斥候」と言えなくもないのではない。敵情を偵察するとともに敵の虚をつく奇襲を敢行したことになるのではなからうか。とすればそれは「斥候」的要素をもった部隊といえるのではあるまいか。

さらに言及するならば、古来から伝承されてきた兵法書・『六韜』に「遠候」語が見える。

太公曰「凡帥師之法、当先發遠候、去敵二百里、審知¹⁰敵人所¹¹在。(絶道」第三十九、虎韜)

四、人物評論について

『平家評判瑕類』の人物評判について述べたい。いったい『平家評判瑕類』は総体として『平家物語』の登場人物に対して、かなり柔軟な寛容度を示していることは以前にも述べたことがあるが、再度評論したい。

①頼政の辞世の歌

まず『平家物語評判』はどういつているか。

頼政最後の歌に、埋木の花さく事もなかりしに、みのなる

はてぞかなしかりけるとつらね給へる事、誠に此人若年より歌の道を好み、世にもうたよむ人の数につらなり給へり。実にかゝる時までも思ひ出されける事、いとやさしきに似たり。

然ども此歌、下の句に身のなる果ぞかなしかりけるとつらね給へる事、源氏一方の大將軍たるべき人の末期の一句には宜しからず。埋木の花さく事もなかりしに、みのなる果は武士の道と、この心につらね給ひなはいみじかるべきか。(巻第四之下「橋合戦」)

次に『平家評判瑕類』ではどうか。

按に此評判は此書一部の中に殊に勝れての不出来千万言語道断あしき評なり。(中略)然るにみのなる果は武士の道と翻案する事、和歌の道にくらきのみかは、武の道にもくらき評なり……かく死に望ても本心を不_レ失して三十一文字をつらね給ふは一生の行状首尾全体是に括囊せり。是全く遺憾述懐に非ず。生死一如法界遊戲三昧的の歌なり。(以下略)

(巻第二「橋合戦」)

このように『平家物語評判』編著者の批判を厳しく批評し、このように下の句を改作することは頼政の心を知らぬのみならず、上の句にも「連続せず」と糾弾している。『平家物語評判』はよく『平家物語』の登場人物を批評するが、これは『平家評判瑕類』の作者のいうように最もあしき評であらう。

②高倉天皇の紅葉を愛でること及び童女の主人の衣裳を盗まれたことに対して天皇、自分の不徳を嘆くこと

まず『平家物語評判』についてみてみたい。林間に酒をあためて、紅葉を焼く詩を高倉天皇が思い出し、かえつて殿守の御奴が天皇の歡感にあづかったことに対しては「是賢王の御氣情たり」と高倉天皇に讃辞を呈しつつ、紅葉を愛でることが長年続くことに対して難じている。

年月紅葉を愛し給ひ、もみぢ山をつき給ふ事然べからず。上に事を愛し起ば、必下に苦、費多きものなり。(中略)

(巻第六之上「紅葉」)

また、童女の衣裳を盗まれたことに対しては『平家物語評判』はどうか。

童女の盗人に主の衣裳を奪とられて、叫声を聞召て、其故を糺されて、是朕が不徳故也としてその色の絹を彼女に下されける事、賢才少ざる者也。一重の衣の天下を助る徳有べし。

されども此君は小善の志はおはしませとも、いまだ大善の志ましまさぬによつて、皆婦人の仁にして其化世に少。(巻第六之上「紅葉」)

これに対する『平家評判瑕類』の評。

按に承安の比は御齡十歳計と有れば、かく幼主にて渡らせ給ふいわけなき御計心も紅葉にめでさせまし／＼けるは流石万乗の主たる御器量有り。たとひ是より大なる事をすき翫ばせ給ふとも幼君なれば是を驕なりといふも忍刻なる評也。(中略)却て歡感成しは誠に稀代の事共也。童女の叫ぶ声を聞召その意趣を聞し召衣裳を給はるのみならず。夜陰なればとて

官人をして送届させ給ふ前後の首尾大慈大悲賢徳の君なり。然るに此評判堯舜の古きためしを引て、小智小善の君なりといふ事、誠に恐多き批判也。(巻第二「紅葉」)

相当に痛烈なる批判を『平家物語評判』に浴びせている。そして高倉院が壮年時代に世間に徳の聞こえなかつたのは、「左右の近臣その人なき故」と断じている。『平家評判瑕類』の作者の高倉院に対する寛容なる精神を読みとるべきであらう。

時として『平家物語評判』の編著者は、時と場とを考えずに批判する悪い癖がある。たとえば仲国が小督を訪ねて来るように高倉院から命じられた時、仲国は院に諫言すべきであつたとしている点である。それに対する『平家評判瑕類』の作者はそれを難じて次のように語る。

按に批評を考ふるに批評作る人は市人か。扱は百姓なるべし。(中略) 小臣は小臣こしんの職あれば大臣おおじんをさし置き、小臣さへぎりて諫を奉る役ならず。(巻第一「小督」)

まことに妥当な意見といえる。しかし、人物評論というものは、ある点では主観的になり勝ちであり、相対的な意味しかないものであるものの、『平家評判瑕類』の評は『平家物語評判』に比べれば、まだまだ寛容の精神に富むものといえようか。

注

(1) 本論文において底本とする『平家物語評判瑕類』は五巻五冊の京都大学図書館所蔵の板本である。

『平家物語』の受容と変容

(2) 『平家物語評判秘伝抄』を『平家物語評判』と以下略称する。ところで、本稿において『平家物語秘伝抄』の本文は、大阪府立図書館蔵の無刊記の板本である。なおそれ以外に天理図書館、駒沢大学・沼沢文庫、秋田県立図書館蔵の写本等を参照した。いずれ近いうちにそれらの諸本系統論を発表するつもりである。

(3) 「伝」とあるのは『平家物語評判』の「伝」の部についての『平家評判瑕類』作者の評論ということである。それ以外はすべて『平家物語評判』の「評」に関する『平家評判瑕類』作者の評論である。以下は同じ。

(4) 私意により区説点をつけ加えた。以下同じ。

(5) 一字の漢字は不明。ふり仮名は「ぞ」と読める。

(6) 巻末に瀧川昌楽庵の跋文があり、それによれば「此の多田五代記十巻は摂北多田兵部の家に蔵する処年尚し」とある。しかし、当該書の解題によれば、それは「仮托の書ならん」とある。

(7) 源頼朝(岩波新書)Ⅲ「配流の時代」

(8) 以下「古事類苑」(兵事部一、兵法)を参照した。

(9) 「物見」という語はあるが、車の物見に使われている語である。

(10) 『平家物語』の受容と変容——『平家物語評判秘伝抄』(「伝」の部を中心として——)(論究日本文学 一九九六年五月)

(ほりたけ・ただあき 華頂女子高校教諭)